【40】

氏　名（本籍）	北原賢一（東京都）
学位の種類	博　士（言語学）
学位記番号	博甲第 5561 号
学位授与年月日	平成 22 年 10 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**English Cognate Object Constructions and Related Phenomena: A Lexical-Constructional Approach** （英語同族目的語構文と関連現象：語彙・構文的アプローチ）

主　査	筑波大学教授	文学博士	廣瀬幸生
副　査	筑波大学教授	博士（言語学）	大矢俊明
副　査	筑波大学教授	博士（言語学）	加賀信広
副　査	筑波大学准教授	博士（言語学）	島田雅晴
副　査	筑波大学准教授	博士（言語学）	和田尚明

論文の内容の要旨

本論文は、英語における同族目的語構文（例：Sam danced a beautiful dance.）の文法的特徴を包括的に捉える分析を提案し、それに基づいて、関連する言語現象に対しても、一定の知見を与えようとするものである。この目的のために、本論文は基本的には Goldberg（1995）などで提案された構文文法理論のわく組みに依拠しつつも、同時に、動詞のもつ語彙的意味特性も重視するアプローチをとる。これが、本論文の副題でいう語彙・構文的アプローチ（Lexical-Constructional Approach）である。

本論文の最も重要な主張は、同族目的語構文は大きく二種類に分けられるということである。一つは「事象依存型」（event-dependent type）と呼ぶもので、同族目的語が、動詞の表す事態を繰り返す事象名詞に相当する場合である。もう一つは「事象独立型」（event-independent type）と呼ぶもので、同族目的語が、動詞の表す事態から独立した対象を表す名詞に対応する場合である。語彙・構文的アプローチの観点から、それぞれの構文にどのような動詞が生起可能かを明らかにし、生起可能な動詞の情報を加えた構文ネットワークを構築することによって、従来の研究に見られる問題点を克服できる分析を提案するというのが本論文の大きな狙いである。

本論文は 7 章からなる。第 1 章では本論文の目的を述べるとともに、Sweet（1891）や Jespersen（1924）などの伝統文法による記述を検証することにより、同族目的語構文に関わる問題点を明確にする。伝統文法では、この構文は、他動詞が同族目的語をとるパタンと自動詞が同族目的語をとるパタンとがあり、さらに同族目的語は様態副詞に相当する意味機能をもつと論じられている。そうすると、次の四点が問題となる。①なぜ同族目的語構文は二つのタイプに分けられるのか、②なぜ自動詞が目的語をとることが可能なのか、③同族目的語と様態副詞との意味の同義性はどこから生じるのか、④二つのタイプは互いにどのように関わり合うのか。本論文の議論はこれらの問題に答えるために展開される。

第 2 章は同族目的語構文に関わる先行研究を概観する。生成文法的アプローチでは、同族目的語が付加詞

なのか、項なのかという問題が頻繁に議論され、そのどちらか一方に決めつけようとする傾向が見られる（Jones（1988）、Moltmann（1989）、Massam（1990）、Macfarland（1995）など）。また、機能主義的アプローチでは、同族目的語構文の振る舞いを動詞の自動詞性・他動詞性によって説明しようとしたうえで、その使用について談話・機能的制約が提案されている（Takami and Kuno（2002）、Kuno and Takami（2004）など）。本章はこれらの先行研究の問題点を指摘し、同族目的語構文の統語的・意味的特性は動詞のみに関わる性質に還元できないことを明らかにするとともに、同族目的語構文の適切な記述には、還元主義的アプローチを放棄し、構文的アプローチをとる必要があることを論じる。

第３章は、本論文が依拠する構文文法理論の基本的考え方について論述する。構文全体が果たす意味機能の重要性を説く Goldberg 流の構文的アプローチを概観し、その重要性を認めたうえで、動詞がもつ語彙的意味特性にも十分な注意を払う語彙・構文的アプローチの必要性が具体的に示される。

第４章では、同族目的語構文の統語的振る舞いと意味機能の関係を適切に捉えるためには、上述の「事象依存型」と「事象独立型」という二種類の構文を設ける必要があることを論じる。そして、それぞれの構文がもつ統語的・意味的特性を詳細に検討するとともに、本章における主張が認知言語学や史的研究の観点からも支持されることを示す。

第５章では、前章で得られた知見に基づき、第１章で設定した四つの問題に取り組む。現代英語における同族目的語構文は二つの独立した構文（事象依存型と事象独立型）からなる複合的カテゴリーであることから、二つのタイプに区別することは至極妥当であること、また、自動詞が同族目的語をとることができるのは、事象依存型が一種の構文的イディオムだからであり、Höche（2009）などの認知言語学的アプローチのように、構文による強制（coercion）やメタファーに基づく説明は不適切であることを論じる。さらに、事象依存型の同族目的語と様態副詞の意味的平行性は、形容詞修飾と副詞修飾の意味概念的な類似性に起因することが示される。最後に、二つの同族目的語構文がどのように関わり合うかという問題に対しては、同族目的語構文と、それに生起する動詞との意味関係に着目し、非能格動詞が同族目的語をとるクラスにおいて二つのタイプが意味的連続性をなすことが明らかにされる。このことは、同時に、同族目的語構文が、事象依存型と事象独立型という一般的な高位レベルの構文だけでなく、動詞のクラスや個々の動詞を指定した下位レベルの構文をも含めた構文ネットワークを形成するということを意味する。本章での議論から、いわゆる項と付加詞の区分は、統語的なものではなく、意味的なものであることが示唆される。

第６章では、同族目的語構文と他構文との比較研究を行う。具体的には、これまで同列に論じられることの多かった、have a walk などの軽動詞構文や smile one's thanks などの Reaction Object 構文が、同族目的語構文とは統語的にも、意味的にも全く異なる構文であることを論じたうえで、結果構文と発話様態動詞の that 節補文との意味的類似性と平行性を明らかにする。とりわけ重要なのが、Iwata（2006）のいう付加詞的結果構文（例：The lake froze solid.）の統語的・意味的特徴が事象依存型の同族目的語構文と平行的な点であり、このことは、両構文が英語のみならず、フランス語、中国語、日本語にも観察されることからも裏付けられるとする。

第７章は本論文の総括と結論である。本論文で提案した語彙・構文的アプローチが、先行研究における三つの主流なアプローチ（生成文法的アプローチ、機能主義的アプローチ、認知言語学的アプローチ）の問題点を克服する最も妥当かつ包括的なものであることがまとめとして述べられる。

審査の結果の要旨

本論文は、英語における同族目的語構文の統語的・意味的特徴を詳細に考察するとともに、構文文法理論の語彙・構文的アプローチに基づき、その特徴に対して統一的な説明を与えようとするものである。英語の

同族目的語構文については、伝統文法以来、さまざまな理論的立場から数多くの研究が行われてきている。それを踏まえたうえで、本論文は、伝統文法以降の主だった研究を批判的に検討することによって、先行研究に見られる経験的問題点や理論的矛盾点を明らかにし、新たに語彙・構文的アプローチの観点から、それらの問題を解決する独自の分析を提案している。

本論文の最大の特色は、同族目的語構文を、一般的なレベルでは、事象依存型と事象独立型の二つに分け、それより下位のレベルでは、動詞のクラスや個々の動詞を指定した、より特殊な構文を設定する点にある。こうすることよって、同族目的語構文一般に関する特徴は、事象依存型か事象独立型かの違いから説明でき、さらに、特定の同族目的語構文に関する特殊な振る舞いは、個々の動詞を指定した下位レベルの構文の特性に起因するものとして説明することが可能となる。このように、同族目的語構文を、一般的な高位レベルと特殊な下位レベルからなるネットワークと捉えることによって、本論文の分析は、先行研究では十分に説明できなかった、多様な言語データを包括的かつ体系的に扱えるようになっていると言える。また、本論文は、英語母語話者へのインフォーマント調査と英語コーパスの両方に基づき新たな言語事実を発掘し、それによって理論を検証するという方法を採用しており、その点で極めて実証的な研究である。さらに、本論文の分析は、同族目的語構文に関連する言語現象に対しても一定の知見を与えることに成功しており、その点で、理論的研究としての意義も大きいと言える。以上から明らかなように、本論文は、現代英語の文法研究と構文文法理論の発展に対して顕著な貢献をするものとして高く評価することができる。

ただし、本論文にさらに求められることとして、次の二点がある。第一に、事象依存型と事象独立型の同族目的語構文はそれぞれ独立した構文であり、いわば同音異義的な関係にあるにもかかわらず、共通のスキーマにより、同族目的語構文という同一のカテゴリーに属するという考え方は、さらに突っ込んだ精緻な議論が必要である。というのは、通常、同音異義の関係にあるものは同一のカテゴリーには属さないとするのが一般的な見方だからである。第二に、同族目的語構文を一般的な高位レベルと特殊な下位レベルからなる構文ネットワークと捉えるのが本論文の強みであるが、それだけに、その構文ネットワークの中間レベルに位置づけられる構文タイプにはどのようなものがあり、それは何によって動機付けられ、また、何らかの制約を受けるのかなどの点について、さらに考察を深めることが望まれる。そうすることによって、本論文の分析がさらに説明力を増すと考えられるからである。もちろんこれら二点は、今後の課題として取り組むことができるものであり、本論文の価値を損なうものではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。